

鈴木 昨日こちらの幼児学園の子供たちに、石井先生から漢字の指導をやっていただいたことですが、ほんとに子供たちは先生のお話に興味をもち、楽しみながらむづかしい漢字を憶えてしまひましたね。

あれを見てみた聴衆が、子供があんなむづかしい漢字を直に憶えられるわけがない。あれはきっと前もって練習したものだ、などと言っている人が多いんですね。中には、一度ばかり教へても、みんな忘れてしまふんじゃないか、と言っている人もおましたが、あれを何回も何回も繰り返して身につけるといふことを誰も考へないんですね。

子供たちが初めて見た字でも、黒板に書いてあったものを消してしまってもちゃんと憶えてゐるあの関心の強さ、印象の深さといふものを大事に考へたいですね。それを、あらかじめ知ってゐる漢字を童話の中に織り混ぜてやったのだらうと考へてゐる大人の、子供に対する認識のなさは本当に残念ですね。

石井 けさも幼児学園で実験してみたのですが、昨日初めて教へた、例へば、お爺さんとか、お婆さん、風船、都だとかいふ漢字を、黒

板に書く端からすらすらと読むんです。ですから、あれをもうちょっと訓練すると永久の知識となりますね。

鈴木 子供たちは先生のお話に夢中になり、楽しみながらああいった漢字を憶えていくんですね。子供の関心を集めて憶えさせてしまふあの素晴らしいやり方、かうした教育のうまさといふものが、育てる側の考へねばならぬことだと思ひますね。ただめちゃくちゃに教へこむだけでは子供はなんの関心も持ちませんし、ますます離れて行ってしまふでせう。

やったけれども結果が悪かったといった場合、教育の場合ではいつもそれを子供のせみに決めつけてしまつて、大人たちが反省することがないんですね。

石井 ほんとにさうですね。例へば食べ物にしても、好き嫌ひのある子供でも、元来は嫌ひでないはずだと思ふんです。人間の食べ物であれば、お腹がすけば食べられるはずのものが、普段はなんだかんだ言つて食べないんですね。それを無理に食べさせようとするから、よけい子供は食べたがらなくなつてしまふのです。「なぜ無理に食べさせようとするのか、これはきっとまづいからに違ひない」

などと想像してしまふんですね。さういふ点からも親の側から好き嫌ひといふものを作ってしまつてゐるわけです。

鈴木 多分にさういふことはありますね。教育の方法としても、子供をまづお腹をすかしておくといふことですね。そして親の方でそれをおいしさうに食べてみせる。すると子供も食べたくなって食べる、といふこのやり方ですね。

石井 これはいろんな意味からも言へるでせうね。私は鈴木先生のヴァイオリソ教育の場でなされてゐる、最初はヴァイオリンを見せておいて、子供がそれを弾きたくなくなるといふ環境を作って待つ、といふあれですが、それは食べ物の場合にお腹がすくまでおあづけにしておくといふやり方と同じですね。私は先生のお書きになった御本をとても興味深く読ましていただいてゐるんです。

教育といふものはすべてさうだと思ふんです。熱心な先生と言はれる人が、案外さうした点に気づかないんですね。食欲のない者に無理して食べさせようとするから、無理が生ずるのですね。猫でも食べたくない時には口の中へつっこんだって食べませんからね。

大体、文字といふものは、幼児期にはなんでも疑問をもって見る

時期ですから、吸収力の旺盛なその時に教へてやれば、子供はきっと食ひついてきて離れないと思ひます。

鈴木 例へば猫といふ字を教へると、子供たちは実際に猫といふものは見て知つてゐますから、その字が猫の顔に見えてくるんですね。なんでもないことです。

「かな」は易しいもの、そして「漢字」は難しいものといふ觀念ですね。なるほど「かな」は書き方からすれば、やさしい字ですね。中国などでは子供がどんどん漢字を読み、書くことを思へば、少しも難しいものでないと思ふんですがね。日本では「漢字」は難しいから「かな」から入っていく訳ですね。これはちょっとをかしいと思ひますね。

音楽の場合でも、ベートーヴェソの第五交響曲を赤ちゃんの時から聴いてゐれば、それが子守歌となつて全部憶えてしまひます。それを表現するといふことは出来なくても、内なる力として貯へるのですね。